

最新旧型機クロックアップ・サイリックス

二十周年記念興行／第二十回公演

シンキイツテン

作・演出／川原 武浩

CAST

ニシヨネ（男）／作業員3／管理人

上瀧 昭吾

ニシヨネ（女）／作業員4／住人

長沼 里佳

ヒラワカ（男）／作業員1

長岡 暢陵

ヒラワカ（女）／作業員2

後藤 香

運び屋

濱崎 留衣

声

森久 智江

STAFF

照明 出田 浩志

音響 青井 美貴

装置 上瀧 昭吾

宣伝美術 岩瀬 幹基

制作 長沼 里佳／中村 歩道

撮影 友山 敬太

記録 ヤマモトハンナ

舞台の前面に壁のように積み上げられた段ボール箱の山。
 その山に遮られ、舞台は段ボール箱の隙間を通してしか見えない。
 その中にペンライトの明かり。
 揃いの作業服と帽子にマスクをした四人がチラチラと見える。

作業員 1

どれ。

作業員 2

どこ？

作業員 3

どれだっけ。

作業員 4

どれだったかな。

作業員 1

記憶がない。

作業員 2

覚えてない。

作業員 3

思い出せないけど。

作業員 4

確かにこの中のどれか。

作業員 1

この中の、どれか。

作業員 2

確かめる？

作業員 3

どうやって？

作業員 4

見えないのにな？

作業員 1

開けられないのにな？

作業員 2

振ってみる？

作業員 3

駄目だろ。

作業員 4

何入ってるかわからないのにな。

作業員 1

危ないだろ。

作業員 2

じゃあ、叩いてみる。

作業員 3

それで何がわかるの。

作業員 4

スイカじゃないんだから。

作業員 1

危ないだろ。

作業員 1・2・3・4、段ボールの隙間から客席の方を覗き込む。

作業員 2

見える？

作業員 3

見えるような。

作業員 4

見えないような。

作業員 1

無理だろ。

作業員 2

じゃあどうすれば。

作業員 3

とりあえず、動かそう。

作業員 4

崩れないように。

作業員 1

壊れないように。

作業員2 動かすって、どこに
作業員3 とりあえず。
作業員4 こっちから。
作業員1 あっちに。

音楽。

作業員たち、慎重に段ボール箱を動かし始める。

いくつかの段ボール箱の方向を変えるとタイトルが現れる

「シンキイッテン」

誰かが真つ先に小さな「ツ」の箱を抜き取る。

次々に段ボール箱が舞台上の別の場所や舞台の外へと運ばれていく。

やがて、舞台の全景が姿を現す。

ダンボール箱だらけの雑然とした空間。

上手側にはうず高く壁のように段ボールが積み上げられている。

作業員2 …ねえ。

作業員2の声に反応せず、黙々と荷物を運び続ける作業員1・3・4

作業員2 (強く) ねえってば！

静寂。

作業員1・3・4、動きを止めて…

作業員2 これって意味、あるのかなあ。

作業員1# (口に指をあてて) シーッ！

作業員3# (口に指をあてて) シーッ！

作業員4# (口に指をあてて) シーッ！

作業員たち、一斉に走り去る。

(シーン0終了)

そこはマンションのエントランスか。
 カートを押しながら、一人の配達員（運び屋）がやってくる。
 台車の上には、これまた山積みの段ボール。
 手元の伝票に目をやり、顔を上げきよるきよるとあたりを見回す。

運び屋

えっと。

運び屋、あからさまに迷っている雰囲気。
 と、エレベーターの扉が開く音。
 マスク姿の住人が降りてくる。

運び屋

あ、あの、すみません。

住人

はい？

運び屋

あの、3105は？

住人

3105？

運び屋

えーと、何とかタワー、これ何て読むんですかね。これ、ここですよ？

住人

そうですね。

運び屋

そうですね。合ってますよね。

住人

すみません、ちよつと急いでるんで。

運び屋

私もまあまあ急いでるんです。急がないと、終わらないんで。今日中に。

住人

管理人室、そっちにありますから。

住人、去る。

運び屋

管理人室？ あ、ここか。

段ボールの山の隙間に小さく窓のような空間が開いている。
 そこにはマスク姿の管理人。

運び屋

あの、すみません。

管理人

はいはい、何？

運び屋

あの3105は。

管理人

31階だよ。ここ1階。

運び屋

いや、それはわかってるんですけど。見つからなくて。

管理人

何が？

運び屋

どうやったらいけるんでしょうか。31階。

管理人

方法は二つ。エレベーターか階段か。

運び屋

ですよ。

管理人

階段はそっちだよ。

運び屋

えーと、この荷物を階段で？

管理人

冗談だよ。そっち、あるでしょ。エレベーター。

運び屋

知ってます。

管理人

行けるでしょ、それで。

運び屋

行けないから聞いてるんですよ。

管理人

行けるよ、31階のボタン押して

運び屋

押したけど、「ランプのつかない階には停止しません」とかなんとか言ってる。

管理人

動かないんです、エレベーター。

運び屋

ああ、じゃあカードかざさないと。

管理人

カード？

運び屋

持ってないの？ あ、もしかしてオートロックすり抜けて入ってきた？

管理人

すり抜けてっていうか、ちょうど出てくる人がいたので、入れ替わりに。まあ、

運び屋

はい、そうですね。

管理人

駄目だよ、ちゃんとピンポンして開けてもらわないと。

運び屋

すみません。荷物が多かったし、急いでたんで、つい。

管理人

もう一回外出て、ピンポンして。でないと動かないようになってるのよ、エレベーター。

運び屋

そうなんですか。

管理人

セキュリティ厳しいんだよ、ここ。

運び屋

そうだ。預かってもらえませんか？ 荷物。

管理人

え、なんで？

運び屋

いや、実はさつきピンポンしたんですけど誰も出なくて。

管理人

じゃあ留守なんですよ。

運び屋

居留守かもしれないじゃないですか。

管理人

そんなの住んでる人の自由でしょ。寝てるかもしれないし、風呂上がりかもしれない。

運び屋

でも日時指定なんですよ？ 向こうからこの日のこの時間に来てって

運び屋

居留守とかなくないですか。

管理人

不在票書いて、宅配ロッカーにいれときゃいいじゃない。

運び屋

空いてないんですよ、一杯で。

管理人

あらそう。

運び屋

預かってもらえませんかね。コンシェルジュサービスみたいな感じで。

管理人

そういう横文字のサービスは、ちよつとやってないんだよねえ。

運び屋

いいじゃないですか。

管理人

万が一、失くしたり壊したりしたら、責任問われるからね。(堂々と) リスク

運び屋

を取りたくない。

管理人

ちよつと預かるだけじゃないですか。

運び屋

じゃあ不在票書いて、あとでまた配達しにくればいいじゃないの。

管理人

だから日時指定なんですってば！

管理人 駄目だって。
運び屋 だって、今持って帰ったら、配達明日になっちゃうんですよ。
管理人 だから明日くればいいじゃないの。
運び屋 日時指定、今日の、今の、この時間なんですってば！
管理人 駄目なものは駄目。とにかく一回出て。ピンポンして。通報するよ？
運び屋 つ、通報？
管理人 家宅不法侵入。
運び屋 そんな大げさな。
管理人 住人の同意を得ずに勝手に入ってきてるわけだから。例えるなら領空侵犯とか領海侵犯みたいなもんだよ。ほら、早く。
運び屋 わかりました。

運び屋、渋々出ていく…フリをして階段の方へ向かう。
その姿が見えなくなったのと同時に明かりが変わる。
そこはどこかのアパートだかマンションだかの一室。
舞台には山積みの段ボール箱。
どうやらそこは引越しの作業中のようなのである。
その山積みの段ボールの陰のどこからか声がする。

平若女（声） ねえ。

返事はない。

平若女 ねえってば。

どこかの陰から男の声。

平若男（声） 何？

平若女 あれ、ない？

平若男 あれって何？

平若女 あれは、あれよ、ほら。

平若男 どんなの。色とか、形とか。

平若女 色は、ほら、茶色で。

平若男 茶色で。

平若女 あ、いや、茶色とは限らないか。でもまあだいたい茶色が多くて。

平若男 犬？

平若女 違う。犬じゃないし、だいたい今犬は要らないし。

平若男 ハムスター？

平若女 生き物じゃない。というか元々犬もハムスターも飼ってないし。ペット禁止だつたし、この部屋。

平若男

イノシシ、ライオン、雀。ダメダメダメ。なぜか頭の中茶色の生き物ばかり

平若女

浮かんでくる。…生き物じゃなくて茶色で、形は？

平若男

形は、ほら、こんな感じよ。

平若女

丸くて。

平若男

(お任せ…丸くて茶色い食品を即答) 松露饅頭。

平若女

たしかに茶色くて丸いけど、今いると思う、それ？

平若男

休憩して、お茶でも飲みたいのかと思って。

平若女

そんな時間ないでしょ。急がないと。

平若男

え、ほんと？

平若女

口も動かしながら、手も動かして。

平若男

はいはい。

平若女

(イライラして) ああ、もう！

平若男

大声出さないで。近所迷惑だよ。壁、薄いんだから。

平若女

あんたがわからないからでしょ。

平若男

そんな。

平若女

だからわかんないかな。茶色で、丸くて、こうビヤーってした感じの。

平若男

ビヤーってした感じって？

平若女

ビヤーは、ビヤーよ。こうビヤーってやって。

平若男

こうって言われても…。他に何か特徴は？

平若女

特徴。

平若男

色と形以外には？

平若女

茶色で丸くて…あ、そうだ、真ん中に穴が開いてる

平若男

ドーナッツ

平若女

近い。

平若男

ミスタードーナッツ

平若女

近いけど、それじゃない。

平若男

ダンキンドーナッツ

平若女

古い。若い人、知らないと思う、それ。

平若男

クリスピークリームドーナッツ

平若女

新しければいいってわけじゃなくて。ていうか、近いけど、ドーナッツじゃな

平若男

くて。そもそも食べ物じゃなくて。

平若女

え、違うの。

だからのんびりドーナッツ食べてる場合じゃないでしょ。いるのよ、今、すぐ、

ここに！

女、段ボールの山の向こうから舞台上に姿を現す。

平若男

今、すぐ、ここで。

平若女

なんでわかんないのよ。

平若男
平若女

そんなこと言われても。
茶色で丸くてビヤーってした感じで、真ん中に穴が開いてて。

女のジェスチャーで「見ている人」は何となく何のことだかわかる。
女が探しているのは明らかに「ガムテープ」であると。

平若女
平若男

あ、そうだ。大ヒント思いついた。
何？

平若女
平若男

発明したのはエジソン。
えーと、電球？

平若女
平若男

どこに穴あいてんのよ、電球のどこに！
エジソンって結局何発明したんだっけ？

平若女
平若男

なんだっけ。電話？
それ、違う人じゃなかったっけ？

平若女
平若男

ジャンピングシューズ。
それ、もつと違う人。…ああ、そうそう、蓄音機だ。

平若女
平若男

古っ。要するにレコードね。
それから活動写真。

平若女
平若男

へー。
あと、ベニヤ板？

平若女
平若男

初耳。よく知ってるね。

男、歩きスマホで段ボールの陰から姿を現す。

平若男

いや、Siriとグーグル先生とウィキペディア。「エジソン・発明・茶色・丸い・真ん中に穴・ビヤー」

Siri「すみません、よくわかりません」

平若男
平若女

Siriもわからないって言ってるけど。
茶色で丸くてビヤーってした感じで、真ん中に穴が開いてて。

男、女のジェスチャーで理解したが単語が出てこない。

平若男

わかった。あれだ。茶色くて丸くて真ん中に穴が開いてて、ビヤーってした感じのあれだ。

平若女

そう、それよ、それ！ 持ってる？

平若男

持ってない。さっきどこかで見たとような気がするけど。

平若女

どこにあった？

平若男

どこだったっけ？

平若女 最後に使ったのいつ？

平若男 いや、今日は使った記憶がない。

平若女 なんてないのよ、要るし、使うでしょ普通。

平若男 そんなこと言われても、分類して詰めるので精一杯で。

平若女 急がないと、いつ来てもおかしくないんだから。

平若男 それは、わかってるけどさ。

平若女 思い出して。どこで見たか。

平若男 そんなこと言われても。

平若女 ああ、もう、いいや、買ってきて。そのへんで。

平若男 え、今から？ こんな時間に？ 探せばどこかにあるんだし、もったいなくな
い？

平若女 そんなに高いもんでもないし、別に何個あってもいいでしょ。むしろ何個かあ
ったほうが捗るし。

平若男 あ。

平若女 何。

平若男 なんか、わかった気がする。

平若女 (ジェスチャー) これ？

平若男 それ。

平若女 どこ。

平若男 なんかね、やっぱり箱の中に入れた気がするんだよね。この中のどれか。

平若女 この中のどれか。

平若男 そう、この中のどれか。

平若女 馬鹿じゃないの？ 今更全部箱開けて探すつもり？

平若男 そうじゃないんだよ。

平若女 そうじゃないって、どうすんの。

平若男 部屋の中に見当たらないってことは、多分間違っどこかに仕舞っちゃった
ってことだと思っんだよね。

平若女 ごめん、何が言いたいのか全然わからない。

平若男 仮に、アレを全部使い切っちゃったとしても、芯は残るわけじゃない。それが
見当たらないってことは、箱の中にあるってことになるでしょ。つまり、蓋をガ
ムテープで…！

ヒラワカ男、「ガムテープ」という単語についにたどり着く。

平若男 ガムテープ！

平若女 それだ、ガムテープだ！

平若男 茶色で

平若女 丸くて

平若男 ビヤーってした感じで

平若女 真ん中に穴が開いてる。

平若男 ガムテープってエジソンが発明したんだ。
常識でしょ。

平若男 いやいや、ハードル高すぎでしょ。

平若女 ああ、スツとした。

平若男 いやあ、よかったよかった。

平若女 よくないでしょ。ガムテープって単語にたどり着いただけで、物はまだ見つかってないんだから。

平若男 そうだった。そうそう、だからね、ガムテープもガムテープの芯も見当たらないってことは、蓋をまだガムテープで閉じてない箱の中に入ってると思うんだよ。だって中にガムテープ入れたら、蓋をガムテープで留められないでしょ？ まあ、ガムテープを切ってから、ガムテープを箱の中に入れて留めればできないことはないけど、不自然だよな、そんな動き。だから、この全部の中のどれかじゃなくて、あの辺の、まだ蓋してない箱の中のどれかに入ってると思うんだよ、ガムテープ。

平若女 なるほど！ 回りくどいけど、言いたいことは理解した。

平若男 ほら、例えばこれとかさ。

平若男、その辺にあるガムテープで止められてない箱を適当に開ける。

平若男 (嬉しそう) おっ！

平若女 あった！？

平若男 ジャジャーン！

箱の中から「ファミリーコンピューター」が出てくる

平若男 うわあ懐かしい！

箱の中から「ドラゴンクエストⅢ」も出てくる

平若男 ドラクエだ。ドラゴンクエストⅢ、そして伝説へ…。やったなあ、やりこんだなあ、これ。

平若女 そういうの、後にしてもらえるかなあ。

平若男 ごめんごめん。

と、部屋に一組の男女(西米男・女)が入ってくる。

西米男 こんにちはー。

西米女 あ、どうもご苦労さまでーす。

平若女 ほら、ぐずぐずしてるから、もう来ちゃったじゃない！ あ、ああ、ほんと御免なさい。まだこんな感じで。

西米男 ああ、全然かまわないですよ。
西米女 こっちでも手伝いますから。
平若女 ほんとスミマセン。
平若男 すみません。
平若女 (平若男に) ガムテープはあとでいいから、とりあえずパパッと箱に荷物詰めちやって。
平若男 はいはい。
平若女 すぐ終わらせますから。
西米男 大丈夫ですよ、そんなに慌てなくても。

と、平若男と女、散らばっている荷物を急いで段ボールの中に詰め込む。
一方、西米男・女、入口付近の段ボールを次々舞台面の方へ運んでいく。

平若女 よし。こんなもんでしょ。あ、そうだガムテープ、ありませんかね？
西米男 ガムテープ？
西米女 持ってないんですか？
平若男 いや、たしかにどこかにあったんですけど、見当たらなくて。
西米男 そうですか。ガムテープ。ガムテープ。どこかに入れたと思うんですけど、ちよつとわからないですね。
西米女 あ、そうだ。

西米女、箱を閉じているガムテープを慎重に剥ぐ。

西米女 これでいいですか？ ちよつと粘着力弱いかもしれないですけど。
平若女 え？

西米女、箱から剥いだガムテープを渡そうとする。
平若女、啞然としながらもガムテープを受け取る。

平若女 え、何してるんですか？
西米女 ガムテープ、要るんですよね？
平若女 要りますけど。
西米女 あ、もつと要ります？

西米女、他の箱からもガムテープを剥ぐ。
西米男もガムテープを剥ぎ始める。

平若女 え？ ちよ、ちよ、ちよ、ストップ、ストップ。
西米男 はい。
西米女 何か？

平若女 え、何してるんですか？
西米女 ガムテープ、要るんですよね？
平若女 要りますけど。
西米女 じゃあ、どうぞ！
西米男 どうぞどうぞ！
平若女 え、駄目ですよね、これじゃ。
西米女 ひつつきませんか？
平若女 そういう問題じゃなくて。
西米男 そもそも、何に使うんですか、ガムテープ。
平若男 何にって、それはもちろん、このへんの段ボールを。
西米女 段ボールを。ああ、そうか！ わかりましたわかりました。そういう使い方を
するんだったらこれじゃ駄目ですよね。

西米女、あたりを見回して：

西米女 ええと、これだったかな。

西米女、更に無遠慮にガムテープを剥いで箱を開け始める。

平若女 え？
西米女 (箱の中を見て) ないなあ。
平若女 あの、何してるんですか？
西米女 大丈夫です。わかりましたから。(西米男に) ほら、あれ、どの箱に入れたっ
け。
西米男 あれって？
西米女 あれは、あれよ、ほら。
西米男 どんなの。色とか、形とか。
西米女 色は、ほら、白くて。
西米男 白くて。
西米女 あ、いや、白とは限らないか。でもまあだいたい白が多くて、
西米男 形は？
西米女 なんかビヨーンってした感じの。
西米男 ビヨーンって何。
西米女 ビヨーンはビヨーンよ、こよう細長い。
西米男 うどん？
西米女 違うよ。だいたいなんで今うどんを探すの。
西米男 お腹すいたのかと思って。
西米女 同じ麺でも今いるならソバのほうでしょ。
西米男 確かに。
西米女 ほら、白くて、細長くて、ビヨーンってした感じの。

西米男 (お任せの麺類) マロニー。
西米女 馬鹿なの？

西米男 ごめん、全然わからない。

西米女 あ、そうだ。白以外にも、ピンクとか緑色とか、色々あって

西米男 素麺！ いや、あの色ついてるのって冷や麦だっけ。

西米女 離れなさいよ、麺類から。

西米男 だって、白くて細長くて、ピンクとか緑とかがあるって。そんなの冷や麦しかないでしょ。

西米女 他にもいろんな色があるのよ。青とか黄色とか。でもだいたい白。

西米男 え、全然わからない。何、それ。食べられるの？

西米女 食べられない。ていうか食べ物じゃないし。

平若男、平若女にせつつかれたのか会話の間に割って入る。

平若男 あの、盛り上がってるところ申し訳ないんですけど、ちょっといいですか？

西米女 あ、はいはい。

平若男 あの、何をしてるんですか？

西米女 探してるんですよ、アレを。段ボールをアレするんですよ。要るんですよ。

平若男 ええ、要ります。要るんですけど。無いと思うんですよ、その。ガムテープで

閉じた箱の中には。

西米女 え、なんでです？

平若男 あれですよ、ガムテープ、探してるんですよ？

西米女 違いますよ、ガムテープじゃなくて、紐。

間。

西米女# 紐だ！

西米男# 紐だ！

平若男 紐。

西米女 白くて、細長くて、ビヨーンってした感じの。

西米男 ピンクとか青とか、他の色も色々あって。

平若男 ああ、ビニール紐。

西米女 そうそう、それです。

平若女 あの、紐でいいんですか？

西米女 段ボールをアレするなら、いいんじゃないですか？

平若女 あ、いいんじゃないんですけど。そうですね、要は蓋が開かなければいいんだから、ガムテープじゃなくて、紐でもいいっちゃあいいですよ。

西米女 紐、どこ入れたっけ？

西米男 どこだっけ？

西米女 押し入れに入ってた荷物ってどの箱だっけ？

西米男・女、きよろきよろと辺りを見回す。

紐、どこだっけ？

いや、そもそもウチに紐あったっけ？

そういえば最近全然使ってないね。

使わないもんなあ、紐とか。

新聞取るのもやめたし。

そうそう。新聞とか、そういうの捨てる時くらいしか使った記憶がないもん。

アンタがジャンプ買うのもようやくやめてくれたし。

いや、まだ買ってるよ。電子版。

一体いつになったら少年卒業して大人になるのよ。

んー、(真剣に) ONE PIECEが完結したら？

西米男・女、それらしき箱を見つけて…

これじゃなかったっけ？

あ、そうかも。

西米男、箱のガムテープを剥いで中身を取り出す。

あつたー。紐く。

黄色と黒のいわゆる虎ロープがひと巻出てくる、

なんかちよつと違わない？

違うけど、まあ紐は紐じゃない？

西米男、話しながら空になった箱を潰す。

と、その音に平若男・女驚いて…

ええっ？

あの、何をしてるんですか？

何って、段ボールをアレするんですよね。

あの、引っ越しですよ。

もちろん、引っ越しです。

ええと、だったら何故？

何故って？

いや、中身を出して、箱潰して、どうするんですか

どうするんですかって、引っ越しで、普通にしますよね。段ボール。

平若男 いやいやいや、しないでしょ、普通
平若女 あの、もう一つ聞きたいんですけど。
西米男 はい。

平若女 どうして荷物：段ボール箱、こっちに固めてるんですか。部屋の奥に。
西米男 いや、あんまり玄関あたりに置いといたら邪魔かなと思って。

平若男 あ、わかった。窓から出すんですね？ 荷物。
西米男 窓から？ いいえ？

西米女 っていうか、出すってなんですか。
平若男 出しますよね、荷物。

西米男 そりゃ荷物は出しますよ。引っ越しですから。片付かないでしょ、(取り)出
さないよ。

平若男 ですよ。荷物(運び)出さないと、引っ越しですもんね。

西米男、他の段ボールのガムテープもはがして中身を出そうとする。

平若男 え、え、え？ だからいったい何してるんですか！

西米男 何って、荷物出そうしてるんですよ、段ボールから。

平若女 段ボールから？

西米男 はい。中身出さないと、捨てられないでしょ、段ボール。
平若女 捨てる？

西米女 畳まないと、紐でくくれないし。あ、でもどうしょ、この紐、切れないよ。ハ
サミないと。

西米男 ハサミ、どこ入れたっけ？

西米女 どれだっけ？

西米男 そうか。あの、ハサミ持ってませんか？

平若男 どこかの箱には入ってると思いますけど、捨てるって何ですか？

西米女 (歯でロープを噛みちぎろうとして) んー、駄目だ。

平若男 無理でしょ。そんなの噛みちぎるなんて、縄文人でも無理ですよ。

平若女 あの、引っ越しですよ。

西米女 引っ越しです。

平若男 引っ越しですよ？

西米男 引っ越しです。

平若男・女と西米男・女、お互いにしっくりこない。

平若女 あのう(西米男・女を指して)引っ越し屋さん、ですよ。

西米女 え？ (平若男・女を指して)引っ越し屋さん、ですよ。

平若女 え？

西米女 ええっ？

平若男・女 違います。

西米男・女 こっちも違います。

平若女 あの、引っ越すんで、荷物運び出さないと。

西米女 あの、引っ越してきたので、中身出して、段ボールとか捨てないと。

全員 ええっ!?

平若女 引っ越してきたって、ここに?

平若男 ウチに?

西米女 はい。

西米男 もちろん。あの、失礼ですけど、引っ越し屋さんでないとするとお二人は…

平若女 住人です、この部屋の。

平若男 この部屋の。

西米女 引っ越してきたんですけど。

西米男 この部屋に。

平若女 いや、そんなはずはないと思うんですけど。

平若男 そう、だよ。

平若女 (小声で) 大家にバレてるってこと?

平若男 (小声で) いや、そんなはずないでしょ。届けも何も出してないんだから。

平若女 (小声で) じゃあこの人たち何なの。なんで引っ越してくるの。空き家になるって家主が知ってて、入居者募集しないと誰も引っ越してこないでしょ、普通。

平若男 (小声で) 知らないよ。なんかの間違いじゃないの?

西米男 なんか、行き違いですかね。

平若女 (何かを誤魔化すように) あ、ああ、行き違い。そうですねー。そうかもしれないですねー。

平若男 あの、部屋とか間違っていないですか。3の105ですよ、ここ。

西米女 はい。3の105です。(西米男に) よね?

西米男 (頷いて) だよ。

と、舞台奥のほうからドタバタと音がする。

運び屋 (声) お邪魔します!

と、そこに息も絶え絶えに運び屋が入ってくる。

運び屋、ゼゼエ言いながら…。

運び屋 ええと、…3…105…こちらですかね。

全員 そうですけど。

運び屋 申し訳ありません、遅くなりました! ちょっと過ぎちゃいましたかね、時間指定。ほんとすみません。

平若女 あ、いえいえ大丈夫です。ちょうど準備できたところだったんで。

西米女 ええ、ちょうどさつきついたところで。

運び屋 実はさつきも一度ピンポンしたんですけど。

平若女 そうなんですか？ すみません、気が付かなかったみたいで。
西米女 すみません、ちよつと予定より着くのが遅れちゃって。
運び屋 いや、いいですいいです、よくあるんで。(息をととのえて) えーと、すみま
せんけど、こちらに判子お願いします。

平若女 判子？

平若男 どの箱だっけ、判子。

西米男 どれに入れたっけ？

西米女 あ、サインでいいですか？

運び屋 あの、お手数ですけど、できれば判子で。シャチハタでいいんで。

西米女 だったらサインでもいいんじゃないですか？

運び屋 不在のお客さんの代わりに勝手にサイン書いて、玄関先に荷物置いて帰った
奴がいてですね、最近えらく厳しいんですよ、規則が。

西米女 いや、でも、いま判子はちよつと。
ねえ。

平若女 じゃあサインと、下にケー番書いてもらっていいですか？

運び屋 ケー番？

運び屋 あ、携帯電話の電話番号を。

西米女 携帯電話？

運び屋 携帯電話。お持ちですよ。

西米女 (西米男に) 持ってる？

西米男 持ってるわけじゃないでしょ、そんな高いもの。

運び屋 あ、じゃあ固定電話でも。

西米男 引っ越してきたばかりで、まだ電話引いてなくて。

運び屋 困ったな。(平若女に) あ、すみませんがサインと携帯電話の番号、ここに
願えますか？

平若女 (サインしながら) これでいいですか？

運び屋 もしかしら後で本部から確認の電話があるかもしれませんが、その時は
判子が見つからなかったのでサインで受け取りましたって言ってもらえれば
いいんで。

平若女 受取？

運び屋 はい、お荷物こちらです。ありがとうございましたー

運び屋、去ろうとするが…

平若女 ちよ、ちよつと、どこ行くんですか。

運び屋 どこって、次のところがまだあるんで。

平若女 持ってってくださいよ。荷物。

運び屋 え？ 引き取りですか？ 聞いてないですけど。…あ、でも大丈夫ですよ。そ
んなに大きくないやつなら。どれですか？

平若男 これ、全部。

西米男 あ、あった。ありました、判子。
西米女 ありました。

運び屋 助かりますー！ じゃあ、ここに判子、お願いします。

西米男 いや、でもウチも心当たりないんですけど。

平若男 いやあ、ウチも違うと思うんですけどねえ。

運び屋 どっちは知りませんが、確かにココ宛なんですよ。

西米男 いや、でも、そちら宛の可能性の方が高くないですか？ 僕ら今日引越して

きたばかりだし。ずっと住んでたんですけどね、ここ。

平若女 そうですけど、でもウチもそんなに宅配便とか送ってくることはないですし。

西米女 でもウチも役所とか郵便局とか、手続きまだ全然してないし。

運び屋 あの、どっちでもいいんで、受け取ってもらえませんか。ほんと、急いでるんで。

西米女 あ、そうだ。そもそも、どこからなんですか、荷物。

運び屋 どこ？

西米女 どこっていうか、誰から送ってきたんですか、それ。

運び屋 ああ、そういう意味ですね。

西米男 誰宛かがわからないのなら、誰から送ってきたのかで判断するしかないです

よね。

なるほど。

平若男 確かに。

平若女 えーと、これは…と。え、なんだこれ？

運び屋 どうしたんです？

西米女 誰からなんですか。

平若女 どこからなんですか。

運び屋 ここです。

平若男 ここ？

運び屋 だから、ここなんです。この荷物の送り主。送り主も、送り先も、ここ。だから

ら、この荷物は、ここからここに。

西米男 え？

西米女 え？

平若男 え？

平若女 え？

音楽。

静かに暗転

(シーン1終了)

明転。

舞台上には先ほどの荷物が残されており、誰の姿もない。
そこにガムテープを手に、西米女が入ってくる。

西米女

あれ？（ガムテープが剥がされた箱を見つけて）もう！なんで開いてるの。
（あたりをみまわして）ちよっと、どこ？

西米男、どこかの段ボールの陰から姿を現し：

西米男

何？

西米女

何してるの。

西米男

読書。

西米女

今すべきことは？

西米男

荷造り。

西米女

今してることは？

西米男

読書。

西米女

馬鹿なの？

西米男

そこまで言わなくても。もうだいたい荷物詰め終わってるんだし。

西米女

だからってまた開けたら意味ないでしょ。

西米男

（読みながら）なんか手持無沙汰でさ。

西米女、西米男から本を取り上げる。

西米女

（絶望的なトーン）…ドカベン。大甲子園ですらない。しかも1巻。なんなの、
第1巻って。

西米男

まだね、山田が中学生で、野球じゃなくて柔道やって…

西米女

そんなこと聞いてない。

西米男

いや、なんなのっていうから、全48巻の中での第1巻の位置づけとかそういう

意味なのかなと思って。

西米女

なんで引越し前のこの忙しいときにドカベンの講釈聞かなきゃいけないの

よ。しかも、よりにもよって全48巻。

西米男

続編の「大甲子園」まで入れると全74巻ね。

西米女

余計悪い。集中して。荷造りに。

西米男

いや、集中はしてたんだよ。

西米女

過去形じゃなくて、現在進行形で集中してもらえないかな。

西米男

ファミコンのソフトとか、本棚の漫画とか箱に詰めててさ。

西米女

集中。

西米男

まあ聞いてよ。で、「大甲子園」詰めてる時に思い出したんだよ。大事なこと。

西米女 大事なことって、何。

西米男 そういえば、ドカベン全巻、持ってたよなあって。

西米女 馬鹿だ。

西米男 そこ、せめて半疑問形くらいで。

西米女 馬鹿がいる。

西米男 そんな珍獣発見みたいに言わなくても。

西米女 そんな馬鹿と暮らしている私。

西米男 自己批判？

西米女 大事なことって、それ？ それでこの辺の箱全部開けてドカベン探したわけ？

西米男 何故？ 今？ このタイミングで？

西米男 なんがあるでしょ、そういう時。テスト前に徹夜で勉強しなきゃいけないのに、

気が付いたら部屋の模様替えしてたりとか。しかもその途中で見つけた長編漫

画読み始めて、気づいたら朝まで漫画読んでただけだったとか。

西米女 いや、その例えじゃ足りないでしょ。

西米男 え、なんで？

西米女 その場合、「勉強しなきゃいけなかったのに、しなかった」ってだけだから。

西米男 0+0は0でしょ。

西米男 そうだね。

西米女 この状況は「引越しの荷造をしなきゃいけなかったのに、逆に荷ほどきした」
ってことで、0-5＝マイナス5くらいになってるでしょ。

西米男 はい。

西米女 例えるなら「勉強しなきゃいけないのに、過去の記憶を抹消してた」くらいの
ことになるんじゃないの、状況が変わらないんじゃないかって、マイナスになっ
てるんだから。

西米男 そう言われれば、はい。

西米女 そこまで大事なの？ ドカベン。

西米男 あ、いや、大事なのはドカベンそのものじゃなくて、ドカベン全巻持ってるこ
とを忘れてしまったってことね。

西米女 ごめん、何が言いたいのか全然わからない。

西米男 なんかそういうことってあるよなあって。

西米女 全然伝わってこないんだけど。

西米男、パタリロ！37巻と、ガラスの仮面35巻を取り出して…

西米男 例えるならば、ドカベンとこれとの違いはなんだろう。「パタリロ！第37巻」
「ガラスの仮面第35巻」。

西米女 ちよっと、それ私の。

西米男 少年漫画と少女漫画、それは確かに違う。けれども、何故、ドカベンを忘れ、

「パタリロ！」と「ガラスの仮面」は忘れていないのか。

西米女 せっかく荷造りしたのに。仕舞ってよ、もう！

西米女、「パタリロ！」と「ガラスの仮面」を再び段ボール箱の中に。
西米女、蓋を閉じ、上からガムテープでとめてしまう。
西米女、そのままその箱を舞台奥の方へ運んでいく。
西米男、別の箱から「こちら葛飾区亀有公園前派出所55巻」を取り出す。

西米男　こちら葛飾区亀有公園前派出所。通称こち亀。第55巻。何故、ドカベンを忘れ、こち亀は覚えていいのか。それは！

西米女　うるさい！

西米男　ごめんなさい。でも、どうしても思う？

西米女　（キレ気味に）知らない。

西米男　じゃあ、大ヒント。

西米女　大ヒントいらぬ。

西米男　ええと、小ヒント。

西米女　大きさの問題じゃない。

西米男　だっていま「知らない」って。わからないならいるでしょ、ヒント。

西米女　そういう意味じゃなくて。

西米男　え、どういう意味？

西米女　今考える必要も答える必要もないでしょ、それ。こち亀とかドカベンとか。

西米男　まあ、そう、かな。

西米女　今すべきことは？

西米男　荷造り。

西米女　今してるとは？

西米男　クイズ。

西米女　馬鹿だな？

西米男　クイズってどうか、カッコよく言うと思案？

西米女　考えない。手を動かす。

西米男　でもさ、色々考えちゃうよね、こういう時って。

西米女　気持ちわかるけど、片付かないから。

西米男　この部屋とももうすぐお別れかあ。

し　しょうがないでしょ、立ち退きなんだから。おかげで溜まっていた家賃もチャラになったし、引越越し代払っても、まだちよつと残るくらい立ち退き料も貰えたし。

西米男　どうするんだらうね、こんなボロアパート。

西米女　壊して、新しくマンションとか建てるんじゃない？

西米男　景気いいんだねえ。

西米女　株とか土地とかすぐ上がってるらしいね。

西米男　実感に乏しいけど。

西米女　あるところにはあるんでしょ。（お金サイン）

西米男・女、軽くため息。
間。

西米男
西米女
何。

ねえ。
そんなに急がなくてもいいんじゃない？ 引っ越し。

西米男
西米女
この状態で今更そんなこと言う？

大家さん、できれば年内、遅くても来月までになって言ってたよね。

西米男
西米女
言ってたけど。新しい部屋、年末から入れるのもつたないでしょ。引っ越

し先、バストイレ付よ。寒い中、小さな石鹸カタカタならしながら銭湯行かなくていいのよ？

西米男
西米女
そうだけど、何日かの違いだけじゃない。

心機一転、新しいウチで新年を迎えるっていいと思わない？

西米男
西米女
うん、わかるけど。なんかバタバタするしさ年末年始って。年明け、松の内明けたくらいでよくないかな。

よくない。

西米女
西米男
よくないかあ。

え、なに、この状態で年越しするつもり？

西米女
西米男
なんか、決心がつかなくて。

今更？ 今にしても年明けにしても、どっちにしたって引っ越しはしなきゃでしょ？

西米男
西米女
いや、引っ越しそのものはいんだけど。その、何を持って行って、何を捨てるかがさ、決心つかないんだよね。

しょうがないでしょ、ポロア・パートじゃなくなる分、部屋狭くなっちゃうんだし。捨てられるものは捨てないと。

西米男
西米女
そう思っって色々見てるとき、どれも大事に思えてきて。

とりあえずジャンプのバックナンバーはいらないと思うな。

西米男
西米女
いや、大事。それすごく大事。

重いし、嵩張るし。捨て頃じゃない？

西米男
西米女
何その嫌な日本語。捨て頃って。

要らないでしょ。もう読んだんだし。こち亀単行本で買ってるでしょ？

西米男
西米女
わかってない。

わからない。何言ってるか。理解不能。

西米男、キツとした表情で：

西米男
「単行本は単行本、ジャンプはジャンプ」

西米女
そんな格言みたいに自信満々に言い切られても、なにも伝わってこない。

西米男
少なくとも単行本が出るまでは、いや、出てからもジャンプ本誌は捨てちゃだめなんだよ。そういうものなの。

西米女　　そういうものって、そのルールはあんたの中で？
西米男　　世間の常識として。
西米女　　いや、知らない、そんな世間。

西米男、週刊少年ジャンプを取り出して…

西米男　「単行本は単行本、ジャンプはジャンプ」。ジャンプの本誌には乗ったけど、色々な理由で単行本には収録されない回っていうのがあるんだよ、結構どの作品にもね。例えば有名なところだと、マンガじゃないけど、古くはウルトラセブンの幻の第十二話「遊星より愛をこめて」のスペル星人の回とかね。

西米女　（かなりどうでもいい）ああ、そう。

西米男　　そういうのが「幻の回」って呼ばれて、マニアに高く売れたりするんだよ。

西米女　（完全にどうでもいい）はいはい。

西米男　　つまりね、これは財産なんだよ。

冷たい間。

西米男　　そう思えば、ほら。なんだか札束みたいに見えてこない。
西米女　　うん。紙屑にしか見えない。

西米女、にこやかにジャンプを投げ捨てる。

西米男　　ああっ！

西米女　　いつまでもジャンプとかファミコンとか、小学生か！　もういい加減いいでしょ、そういうの。

西米男　（ジャンプを大事そうに拾って）わからないかなあ、このロマン。

西米女　（強く）捨てて。荷物、半分くらいにしなきゃいけないんだから。

西米男　　え、そんなに！？

西米女　　言ったでしょ。

西米男　　記憶にございません。

西米女　　捨てないなら、心機一転、あんたごと捨てていこうか？

西米男　　申し訳ございません。

西米女　　言葉はいらさないから、モノを捨てて。

西米男　（平伏）そこはなにとぞご容赦を。

西米女　　新居に持つていくのはこっち、捨てるのはこっちね。

西米男　　この通り、お慈悲を。

西米女、完全に無視して荷造を続行する。

と、西米男、ジャンプを手に部屋から逃げ出す。

西米女

あ、ちょっと！ どこいくのよ！

西米女、西米男のあとを追う。

入れ違いにジャンプを手に平若男が入ってくる。

平若女もそのあとに続いて入ってくる。

平若女

だから捨てて言って言ってるでしょ！

平若男

そこはなにとぞご容赦を。

平若女

断捨離よ、断捨離。

平若男

だって、これ捨てちゃったら、もう二度と手に入らないかもしれないんだよ？

貴重だと思うんだよ、こち亀最終回のジャンプ。

平若女

だから何。

平若男

コンビニ何軒も回ってやっと見つけたやつなんだよ、これ。

平若女

そんなもの後生大事にとってどうするわけ。

平若男

どうするって、とりあえず、いつか必要になるかな、って。

平若女

「いつかいるかも」は「いつになってもいらない」と同じ意味。

平若男

プレミアがついて、高く売れるようになるかも。

平若女

プレミアあって、せいぜい何百円とかでしょ？

平若男

今はね。でもあと何年か経てばきつともっと高くなると思うんだよ。…三十年

平若女

前のジャンプ、定価180円。今、ヤフオクとかメルカリでいくら思うと思う？

平若男

どうでもいい。

平若女

なんと一冊五千円！ 30年でざっくり30倍！

平若男

はいはい、すごいすごい。

平若女

この280円のジャンプが30倍になったら、九千円弱だよ。とつとかなないと

損でしょ。

平若女、ため息をひとつ大きくついて…

平若女

ちよっと、そこ座って。

平若男

なんでしよう。

平若女

あのさ。

平若男

はい。

平若女

30年後ってさ。

平若男

はい。

平若女

まだ生きてると思う？

平若男

微妙だけど、多分。

平若女

生きていたとして。

平若男

はい。

平若女

それ持つてるの、覚えてると思う？

平若男

ボケてなければ、多分。

平若女 覚えていたとして。
平若男 はい。
平若女 それ、本当に三十年経ったら価値が出るの？
平若男 それは、わからないけど、多分。
平若女 価値が出たとして。
平若男 はい。
平若女 仮に九千円になったとして。
平若男 はい。
平若女 売れるの？
平若男 そりゃ、売れるでしょ、マニアとかに。
平若女 そういう意味じゃなくて、アンタ、手放せるの？ それ。
平若男 多分。
平若女 無理でしょ。
平若男 なんて。
平若女 いつもそうじゃない。
平若男 いつもって、例えば？
平若女 株。
平若男 ドキッ。
平若女 FX。
平若男 ギクッ。
平若女 ビットコイン。
平若男 ズキッ。
平若女 いつもそう。流行りにのって、色々買うけど損ばかり。
平若男 いや、まだ売ってないから、損はしてない。
平若女 損が確定してないってだけでしょ。
平若男 含み損は損じゃない。
平若女 含みでもなんでも損は損。
平若男 いや、このまま持つとけばいつかはきつと上がるからさ。
平若女 そう言って、前も株で大損しなかったっけ。
平若男 あ、ああ、JALの株ね。あんな大きな会社がなくなるなんてねえ、まさかの想定外。
平若女 それだけじゃないでしょ。
平若男 あ、ライブドア株。ホリエモンの。
平若女 冬のボーナス全額消えたよね。
平若男 あったねえ、ライブドアショック。もう何年前だっけ。
平若女 そんなアンタが、売れるわけがない。もし本当に価値が出て、値段が上がったら上がったでどうせまたこう言うのよ
平若男 「きつと、もつと上がるから、もう少ししてから売ろう」
平若女# 「きつと、もつと上がるから、もう少ししてから売ろう」って。
平若男 : 言うかも。

平若女 だったら、持っても捨てても一緒でしょ。
平若男 それは、その。
平若女 捨て・て・て！

平若男、ジャンプを手に脱兎のごとく逃げ出す。

平若女 ああ、もう！ 都合が悪くなるとすぐ逃げる！

平若女、平若男のあとを追っていく。

運び屋、大量の荷物を台車に乗せて入ってくる。

オートロックのインターホンの前で立ち止まり部屋番号を押す。

チャイムの音。

(声) はい。

運び屋 ヤマト急便です。

(声) お願いしますー！

自動ドアの開く音。

運び屋、今度はドアのチャイムを鳴らす。

先ほどとは違うチャイムの音。

少し間があつて玄関の扉が開く音。

運び屋 こちらに判子お願いします。ありがとうございます。

玄関の扉が閉じる音。

チャイム、玄関の扉が開く音、閉まる音、それらがエンドレスに鳴り響く。

運び屋 こちらに判子お願いします。ありがとうございます。ヤマト急便です。こちらに判子お願いします。ありがとうございます。ヤマト急便です。こちらに判子お願いします。ありがとうございます。ヤマト急便です。こちらに判子お願いします。ありがとうございます。

永遠のような反復作業。

その繰り返しで、やっと台車の上の荷物がなくなる。

運び屋、小走りに外へ。

そしてすぐに台車に荷物満載で戻ってくる。

運び屋 はあ。キリがない。

運び屋、荷物を手に、茫然と…

運び屋、インターホンのボタンをを連打。

むなしくチャイムの音だけが響く。

運び屋、踵を返し去る。

と、そこに西米男と西米女が戻ってくる。

西米男

この通り、ジャンプだけは。

西米女

じゃあファミコン捨てる？

西米男

この通り、ファミコンだけは。

西米女

おかしい。だけって日本語の使い方がおかしい。

西米男

この通り、ジャンプとファミコンだけは。

西米女

なんか去年新しいの買ってたじゃない、ゲーム。ええと、ほら、なんとかエンジン。

西米男

PCエンジンね。

西米女

あと今年もなんか買ってたよね。

西米男

メガドライブ。

西米女

だったらもういいじゃない、ファミコン。

西米男

ファミコンはファミコン、PCエンジンはPCエンジン。そしてメガドライブ

はメガドライブ。

西米女

またそれ？

西米男

ドラクエはファミコンでしかできないし、ギャラガはPCエンジンでしかで

きない。そしてスペースハリアーはメガドライブでしかできない。全部いるんだ

よ。ファミコンもPCエンジンもメガドライブも。

西米女

ドラクエ、もうクリアしたんでしょ？ 1も2も3も。

西米男

したよ、もちろん。

西米女

だったらソフトだけでも捨てたら。本体捨てるとは言わないからさ。もう遊ん

でないカセットだけで何箱かあるでしょ？

西米男

うーん。

西米女

じゃあ何捨てるのよ！ 漫画とゲームばかりでしょ、アンタの荷物！

西米男

とりあえず、あとで考えよう。

西米女

あとっていつよ。

西米男

それは、そのうちに。

西米女

今考えて、今。こんな部屋で年越しとか絶対嫌だからね。

西米男

そんなこと言われても…。他に捨てられそうなもの、あったかなあ。

西米女

なさそうだから捨ててって言ってるのよ。漫画とゲーム以外の荷物って、洋服

とか、それくらいでしょ。やめてよね、要るモノ捨てて、ゲームとジャンプ残す

とか。

西米男

…どうして人は服を着ないといけないんだろうね。

西米女

そこまでして捨てたくないの。ジャンプ。

西米男

うん。

西米女、深い溜息。

西米女、その辺にある段ボール箱を持ちあげ「捨てる」エリアに移動。

捨てる。

やめて。

西米男、その段ボールを「持っていく」エリアに戻す。

捨てる！

やめて！

絶対捨てる！

お願いやめて！

「捨てる」「やめて」と不毛な攻防がひたすら繰り返される。

箱の位置は左右でずいぶん入れ替わる。

が、結局全体としては大して変わっていない。

西米男、西米女、ハアハアと息を切らして…。

せめて中身だけでも確認させて。

確認しても一緒。捨てる。

捨てるから。中身をちゃんと吟味して、要らないものだけ。

そしてドカベン見つけてまた読書？

いや、ない。ドカベンがあっちの箱だから。

そういう意味じゃない！

ごめんなさい！

中に何入れてたか思い出せない時点で、要らないのよ、そんなの。

でも、あとになってなにかのきっかけで思い出すこともあるじゃない。ドカベ

ンみたいに。

だまれー。もうドカベンのドの字も聞きたくない。

何故、ドカベンは忘れてしまっていて、こち亀は覚えているのか。それは！

しつこいー！

それはね、ドカベンはもう終わってて、こち亀はまだ続けているから。…だと

思うんだよ。

静かな間。

だから？

だからって？

だから、それに何の意味があるの。今の、この状況で。

西米男

パタリ口も、ガラスの仮面もまだ続いている。だからもちろん覚えてる。でもドカベンは完結してしまった。だから段ボール箱に仕舞って、読まなくなってる。そのうち持つてることも忘れてしまった。でも、この引越していきついで思い出したわけじゃない。

西米女

だから？

西米男

昔熱中してたりとか、好きだったこととか、そういう物でも、しばらく目にしてないと忘れちゃうもんなんだあって。

西米女

そういうノスタルジーみたいなの、今はいいから。

西米男

そういうの他にもあるんじゃないかと思って。

西米女

あるかもしれないけど、今はいいから。せめて引越し先で荷ほどきする時にして。そういうの。

西米男

今、いらなと思うって捨ててしまったら、いつか思い出したときに、きっと後悔すると思うんだよ。

西米女、大きなため息。

そして深呼吸のように息を大きく吸い込んで…

西米女

馬鹿め！ 馬鹿か！ 馬鹿が！ どれが一番傷つく？

西米男

どれもそれなりに。

西米女

結局捨てたくないだけじゃない。…馬鹿？ 馬鹿なの？ (井上陽水風にお

元気でですか？ 脳細胞。

西米男

結論としてはそういうことだけど、理由を聞いても、それでもまだわかってもらえないかな？

西米女

忘れたままで、思い出さなければいいのよ。下手に中身を確認したりしようとするから、いけないことまで思い出しちゃうんでしょ。だから、開けない。そして捨てる。

「捨てる」「やめて」の攻防が再開。

西米女

捨てる！

西米男

やめて！

西米女

今すぐ捨てる！

西米男

お願いやめて！

段ボール箱は西米女の「捨てる」側に。

二人、また息が切れて…

西米男

(ゼエゼエ) あのさ。

西米女

(ゼエゼエ) 何。

西米男

本当にいいの？

西米女 だから何が。
西米男 捨ててもいいの？ それ。
西米女 当然でしょ！
西米男 いや、でも、その箱さ。
西米女 何。
西米男 その箱、自分のじゃないような気がしてて。
西米女 え？
西米男 なんか、全然覚えがないんだよね。
西米女 え、これもしかして私の？
西米男 かもしれないよ。

微妙な間。

西米女 中身、確認していい？
西米男 その発言、思いつき矛盾してない？
西米女 いや、だって中身が大事なものだったら大変じゃない。
西米男 いやいやいや、さつき「中に何入れてたか思い出せない時点で、要らないもの」
とかって言ったの誰。

西米女 言ったけど。
西米男 ひどくない？ 人のモノなら見ないで捨てさせて、自分のモノなら確認する
つて。自分の利益最優先？ 帝国主義者？

西米女 そんなおおげさな言い方しなくても。だいたい、アンタの荷物が多すぎるから
いけないんですよ？ 私の荷物捨ててどうするのよ。

西米男 そんなに多いかな。
西米女 多い。断然多い。荷物の七割アンタのゲーム、そして漫画。
西米男 それは事実に基づくの？
西米女 う。

西米男 単なる印象じゃないの？
西米女 そりゃ数えたわけじゃないけど。

西米男 そっちだって、少女漫画たくさん持つてるじゃない。ガラスの仮面とか。パタリ
ロとか。
西米女 だからってアンタみたいに花とゆめ、バックナンバーまで取ってるわけじゃ
ないし。
西米男 なんかくわからない健康器具とか、ダイエット本とかも、いっぱいあるじゃ
ない。

西米女 あるけど。ちよつとよちよつと。
西米男 それは事実に基づくの？
西米女 いや、数えたわけじゃないけど。
西米男 異議あり。
西米女 何よ。

西米男 公平に、数えてみようよ。どっちの荷物が多いのか。
西米女 数えるって、今から？

西米男 うん。

西米女 この荷物全部？

西米男 もちろん。

西米女 やめてよ、そんな不毛なこと。

西米男 じゃあ数えない代わりに、そっちの荷物も少しは捨ててよ。

西米女 なんだ。

西米男 ちゃんと数えたら、本当はそっちの荷物の方が多いかもしれないわけじゃない。本当に七・三でこっちの荷物が多いならしょうがないけど、もし六・四とか、五・五、もしかしたら逆に三・七とかだったら、こっちばかり捨てるって不平等でしょ。

西米女 ないないありえない。

西米男 だったら数えようよ。

西米女 だから嫌だって。

西米男 じゃあ、こういうのはどうかな。幸い引っ越し代は全額払ってもらえるんだし、とりあえず今ある荷物は全部新居に運んじゃって、向こうで荷ほどきしながら捨てるものを決める。

西米女 それって、問題を先送りしてるだけなんじゃないの？

西米男 これで年内に引っ越し出来るし、どっちの荷物かなんて数える必要もない。問題は全てクリアー。パーフェクト折衷案。

西米女 でも、それだと引っ越してからが大変でしょ。向こうで。

西米男 まあ、なんとかなるんじゃない？

西米女 嫌な予感しかないんだけど。

西米男 じゃあ数える？

西米女 なんだろう、このどっちを選んでもハズレな感じの二択。

西米男 (答えを促すように) 数える、持っていく、数える、持っていく…

西米女、ひとしきり悩んで…

西米女 わかった。とりあえず持っていく。それでいいよ。でも、絶対捨ててよね、引っ越し先で。

西米男 よし！ そうと決めたら残りの荷物も全部詰めちやおう、適当に。あと、台所とかだっけ。

西米女 うん、炊飯器とか、お鍋とか。

西米男、西米女、キッチン方向へへ去る。

入れ替わりに平若男、平若女、入ってくる。

平若女の手には週刊少年ジャンプ。

平若女
それでは、お別れです。

平若女、ゴミ袋にジャンプを放り込む。
その足でゴミを捨てに向かおうとする。

平若男
(泣き崩れる) よよよよよ。

平若女
これくらいで泣かない。

平若男
さらば、両津勘吉。

平若女
別に死んだわけじゃないでしょ。

平若男
秋本治先生による四十年間の連載、その最終話。その掲載誌。それが今やただのゴミ扱い。これが涙なしに語れましょうか。

平若女
あのさ。

平若男
はい。

平若女
私も読んだけどさ。

平若男
はい。

平若女
なにあれ。

平若男
感動の最終回。泣けた。心から涙した。

平若女
はあ？

平若男
はあって何。

平若女
四十年も、一週も休まずに連載しつづけたその最終回があれ？ 感動的なエピソードでもなく、伏線回収するでもなく、最後の最後に復活してほしいキャラクターランキングで終わるって、何なの。

平若男
壮大な夢オチだった「ハイスクール！奇面組」よりいいじゃない。

平若女
そんなんだっただけ？ 奇面組。

平若男
こち亀の最終回には、深い深い意味があるんだよ。最終回だけど、変わらないし、終わらない。そんなメッセーじだと思っただよ。深読みすると。

平若女
どんだけ深く読んだらあれ読んで涙が出るの。

平若男
どんだけ浅く読んだらあれ読んで涙が出ないですむの。

平若女
それ、絶対深読みのし過ぎ。そこまで考えてないと思う、作者。

平若男、ガバとひれ伏して…

平若男
この通り、ジャンプだけは。

平若女
じゃあSwitch捨てる？

平若男
この通り、Switchだけは。

平若女
おかしい。だって日本語の使い方がおかしい。

平若男
この通り、ジャンプとSwitchだけは。

平若女、土下座状態の平若男を見て…

平若女
：なんか激しいデジャヴ。前にもこんなことあったような
隙あり！ ビッグチャンス！

平若男、ゴミ袋を引っ張る。
平若女、ゴミ袋を引っ張り返す。
ゴミ袋を巡る激しい攻防。
と、両側から引っ張られたゴミ袋が破れ、中身があたりに散乱する。

平若女
あああ！ もうなにやってんのよ！
平若男 ジャンプ！ よかった！ もう離さない！
平若女 (ゴミを集めながら) ほんと、もう、馬鹿じゃないの！
平若男 両さん、無事でよかった。

平若男、ジャンプの表紙を確認。

平若男 え？
平若女 何。
平若男 違う。これ。
平若女 違うって、何が。
平若男 ドラゴンボール。両さんじゃない。

いつの間にか、それは昭和最後の少年ジャンプに変わっている。
暗転。

(シーン2終了)

暗闇から電話の音が聞こえる。

電話声

要するに送り状の届け先住所はあるけど、宛名がないってことね。で、依頼主は同上。伝票番号は？ はい。6220。はい。3480。はい。8566。復唱します。6220・3480・8566ね。

明転。

運び屋、宛先不明の荷物を抱えたまま、電話中。

電話声

その伝票番号の荷物ね、あるのはあるけど、その荷物とは違うっぽいねえ。もう配達完了になってるし。

運び屋

え、どういうことですか。どうしたらいいんです、これ。

電話声

返送しようにも、返送先もそこだからねえ。持って帰ってきててもどうしようもないし。立ち会って、開けてもらったら？

運び屋

大丈夫ですか。なんかヤバイ荷物で、開けたらドカンとか嫌ですよ。

電話声

センター通るときにX線通してるから大丈夫よ。昭和じゃないんだから。今時ないよ、小包爆弾とか。

運び屋

わかりました。

電話声

あとね、悪いんだけど、その荷物終わったら、子会社の方の手伝いに回ってもらえるかな？ 残りがあつたら明日の配達でいいから。

運び屋

え、いいんですか、残り？

電話声

日時指定の荷物、もうないでしょ。

運び屋

あ、はい、確か。

電話声

じゃ、よろしく。

運び屋、電話を切って…

平若女

どうでした？

運び屋

それが、本部でもわからないらしくって。

平若男

伝票の番号でも？

運び屋

はい。なんか、別の荷物が登録されてるみたいで。

西米男

え、そんなことあるんですか？

運び屋

あるんですよ、時々。伝票の番号って使いまわしてるんで。

西米女

え、そうなんですか？

運び屋

そうなんですよ。なんせ、うちの会社だけで年間で18億個運んでるんで。

平若女

18億個！

運び屋

ヨソの会社のやつも入れたら、日本全体で40億個だったかな。

平若男

そりゃすごい。

運び屋 あのと、結局本部でもわからないみたいなんで、ここで開けますから、これ。
平若女 だったら、しょうがないですね。
運び屋 立ち合い、お願いできますか？
平若女 (平若男を促して) ほら。
平若男 あ、はいはい。
運び屋 もうお一人、お願いできます？
西米女 (西米男を促して) ほら。
西米男 あ、はいはい。
運び屋 じゃあ、開けますね。

平若男、西米男、運び屋の持つ宛先不明の荷物の周りに集まる。
運び屋、ガムテープを剥いで、蓋を開く。
全員、中を覗き込んで…

運び屋 わかります？
平若男 いや、これ、なんですかね？
平若女 ねえ。
西米男 裏返しだし、これじゃなんとも。
西米女 ねえ。
運び屋 じゃあ、出しますね。

運び屋、慎重に中身を取り出す。
出てきたのは、額縁のようなもの。

運び屋 額縁、ですかね。
平若女 ですね。
運び屋 何か思い当たります？
平若女 (平若男に) アンタ、なんか通販で注文したりした？
平若男 額縁？ いや？
平若女 いえ、全然ないです。
運び屋 どうですか？
西米女 なんか心当たりある？
西米男 いや、全然。
運び屋 どちらも心当たりがないってことですかね？
平若男# (曖昧な感じで) ええ、はい。
平若女# (曖昧な感じで) ええ、はい。
西米男# (曖昧な感じで) ええ、はい。
西米女# (曖昧な感じで) ええ、はい。

運び屋、額縁の中身を確かめて…

運び屋

ただの額縁ですね。

額縁の中には何も入っていない。

運び屋、偶然「平成おじさん」風に額縁をかざす。

平若女

やっぱり額縁持つと、それ、やりたくなりますよね。

運び屋

え？ ああ、平成おじさんですか。そんな風に見えました？ 特に意識してなかったですけど。

西米女

え、なんですか、平成おじさん？

西米男

平成おじさんって、何ですか？

平若女

若い人は知らないか。そうだよね。三十年以上前だしねえ。

平若男

おじさん繋がりでいくと、風船おじさんって人もいたねえ。

西米女

風船おじさん？

西米男

なんですか、その人。

平若男

いたでしょ、風船おじさん。風船で太平洋横断するって行って行方不明になった人。

西米女

いつ頃の話なんですか？

平若男

あ、これももう三十年前とかだっけ。

平若女

若い人にそんな話したって、知ってるわけないでしょ。まだ生まれてすらないんだから。

西米男、西米女はさっぱりわからない反応。

運び屋

あの、平成おじさんも、風船おじさんもどうでもいいんですけど、どうですか、

西米女

これ？ 心当たり…

西米男

ないです。全然。(西米男に) どう？

平若女

いや、全然。

平若男

うちも全然。

平若女

はい。全然。

運び屋、額縁をその辺に置いて…

運び屋

まあ、ウチとしては届けたのは届けましたんで。

平若女

はい。

運び屋

あとはそちらで話し合うなりなんなりして、なんとかお願いします。それじゃ失礼します。ありがとうございましたー！

運び屋、去る。

平若女

(運び屋に) あ、あの、ちょっと！

平若男

(平若女に) どうする、これ。

平若女

どうするって、どうしようもないでしょ。誰のかもわからないのに。

平若男

いる？

平若女

いや、別に。

平若男

(西米男・西米女に) あの、要ります？ これ？

西米女

いや、要らないです。どう？

西米男

うん、別にどっちでも。

平若男

じゃあ、捨てちゃってもいいですかね、これ。

西米男

でも、なんかそれもまずくないですか。捨てちゃった後になって、実は大事な

西米女

ものだった、みたいなことになったら。

平若男

またそんなこと言う。ただの額縁でしょ？

西米男

じゃあ、とりあえずとつといて、あとで考えます？

平若男

それが無難じゃないですかね。

平若男

じゃあ、まあ、とりあえず。

平若男、額縁を元通り箱に仕舞う。

西米女

そんなことより、あの、この部屋の事なんですけど。大家さんとか、不動産屋

平若女

確認。

西米女

なんか行き違いがあるみたいだし。日にち間違いとかですかね。

平若女

そうですね。なんですかねえ。

西米男

近くの公衆電話って、どこにあります？

平若男

公衆電話？ えーと、確か角のコンビニのところにありますけど。

西米男

そうですね。

平若女

あそこ、コンビニごとなくなっただんじやなかったっけ？

平若男

え、そうなの。あっちの方、あんまり行かないからさ。じゃあ、ちょっと遠い

平若女

けど、コインランドリーの角のことか。

西米男

あそこもなくなっただんじやないかなあ。

西米女

テレカ、持ってる？

西米男

うん、あるよ。

平若男

あ、ていうか、電話するなら携帯…

平若女、スマホを取り出そうとした平若男の鳩尾に一発。

平若男

げほっ。

西米男

どうしたんですか？

西米女

大丈夫ですか？

平若男

大丈夫です、ちょっと急に持病の胃炎が。

平若女 (小声) 駄目。連絡駄目。

平若男 そうだった。

西米男 コインランドリーのとこって、どう行ったらいいですかね。まだこの辺よく分からなくて。

平若女 あの、ほら、もうこんな時間だし。ちよつと遅くなってるみたいですけど。引越し屋さんもそろそろ来るはずだし。いいんじゃないですかね、連絡しなくても。

と、部屋のチャイムが鳴る音。

平若女 ほら来た！ どうぞー、開いています。

運び屋 (声) お邪魔しまーす！

と、そこに入ってきたのは運び屋。

平若女 あれ、さっきの？

運び屋 どうも、ヤマト急便です。

平若女 まだ何かあるんですか、荷物。

運び屋 いえ、荷物はないんですけど、伝言が。

平若女 伝言？

運び屋 はい。「引越し屋さんには、来られない」って。

平若女 え？

運び屋 来れないそうです、引越し屋。

平若女 え、どういうことです？

運び屋 うちの会社の子会社なんですけど。あの、色々問題起こして、業務停止命令受けちゃってですね。

平若男 あ、なんかニュースでやってた、それ。

運び屋 このエリアの営業所は大丈夫なんですけど、他所の応援とかで人手が全然足りなくて。前の現場も随分長引いてるみたいで、ちよつと今日中には間に合わないみたいなんですよ、こちら。ほんと申し訳ありません。

平若女 いや、困るんですけど。それじゃ。

平若男 え、じゃあ、俺たち今話題の引越し難民ってやつ？

運び屋 ええ、まあ、そういうことに。申し訳ありません。

西米女 あの、うちの方は…

運び屋 楽々引越しパックですよ。荷ほどきのお手伝いとゴミの回収までセットになってる。そちらもちよつと今日中には…。

西米女 いや、困るんですけど。それじゃ。

運び屋 ですよ。申し訳ありません。

平若女 あの、じゃあ、明日まで待たないといけないんですか、引越し。

運び屋 いいえ。今からやります。

平若女 今からやるって。
運び屋 自分、やりますんで。
平若女 え、宅配便屋さんですよ。
運び屋 ええ、宅配便です。で、今から引っ越し屋になります。

運び屋、首から下げたネームプレートを差し替える。

運び屋 どうも、ヤマト引っ越しサービスです。

謎の8ビットなレベルアップ音。

西米男 転職だ！ ジョブチェンジだ！
平若男 ドラクエ3だ。
西米男 「不思議な踊りを踊っている」
平若男 「変な顔をしている」
西米男 「エッチな想像をしている」
平若男# 遊び人だ！
西米男# 遊び人だ！

男子チーム、盛り上がる。

西米男 ルイードの酒場！
平若男 ダーマの神殿！
西米男 メラミ！
平若男 ベホイミ！
西米男 遊び人からしか、賢者に転職できない。深い、深すぎる。
平若男 いやあ、あのシステムがシリーズ全体に深みを与えたよね。
平若女 何そっちだけで盛り上がってんの。
西米女 ドラクエやってないから全然わかんないんだけど。
西米男 ええとね、まずドラクエ3では「職業」っていう概念が導入されてね…
西米女 解説してって意味じゃない！

男子チーム、シユンとする。

運び屋 あの、遊び人じゃないです。引っ越し屋です。
平若女 あの、他には？
運び屋 一人です。
平若女 応援とかは。
運び屋 どうですかね。来るかもしれないし、来ないかもしれません。待ってても仕方ないんで、とりあえず大丈夫です、頑張ります。

運び屋、気合を入れて…

運び屋 それじゃあ、早速ですけど、どれがどれですかね。持っていくのと、捨てるのと、あと、ここで荷ほどきするのと。

平若女 あ、持っていくます。だいたい全部。

西米女 あの、この辺のはウチののだと思うんですけど。

運び屋 え、混ざっちゃってるんですか？

平若女 いや、そんなはずないんですけど。

西米女、箱から。パタリロ！37巻と、ガラスの仮面35巻を取り出す。
その単行本のページは、新品同様に真っ白である。

西米女 ほら。私のです、これ。パタリロとガラスの仮面。

平若女 え、それ私の…じゃないか。えっと、どれだっけ。

平若女、箱を探して…

平若女 あった。

平若女、別の箱から。パタリロ！37巻と、ガラスの仮面35巻を取り出す。
その単行本のページは茶色く変色している。

平若女 うわあ、久しぶりに見たらボロボロだ。

西米女 偶然ですね。好きなんですか？

平若女 好きっていうか、もう半分くらい惰性で買ってる感じですかね。

西米男も、大甲子園全巻セットを箱から出して…

西米男 大甲子園全巻セット。これもウチのです。

平若男 大甲子園！ 持ってた持ってた、それ。だいぶ前にブックオフに売っちゃったけど。

西米男 ブックオフ？

平若男 ブックオフっていうか、古本屋？

運び屋 ってことはやっぱり混ざっちゃってるってことですかね。あの、お手数ですけど中身確認して、分類してもらえますか？ こっちはわからないんで。

平若女 確認して分類。

平若男 これ全部ですか？

運び屋 もちろん。確認しないと、わからないですよ。どれがどれか。分類できたやつからどんどん運んじゃいますんで。

西米女 あのと、確認するのはいいんですけど、他人に見られたくないものってありますよね、お互い。あんまりむやみやたらに開けるのもどうかと思うんですけど。それは確かに。

平若女 じゃあ確実に自分のだって思う荷物だけ先に開けて、わからないのとか関係なさそうなのはとりあえず後回しにするっていうのはどうですかね。
西米女 なるほど。

運び屋 じゃあ、持つて行くのは(下手側)こちらに。それから、ここで荷ほどきするのは(上手側)こっち。捨てるのは(舞台奥)このあたりで、後回しにするのは(舞台面)ここをお願いします。

平若男 すみません、ええと、どれがどこでしたっけ。

運び屋 あ、すみませんベラベラと早口で。じゃあ、もう一回言いますね。持つて行くのはこっち。

平若男 はい。

運び屋 荷ほどきするのはこっち。

西米男 はい。

運び屋 捨てるのはこのあたりで。

平若男# はいはい。

西米男# はいはい。

運び屋 後回しにするのはここに。

平若男 了解です！

西米男 わかりました。

四人、それぞれ箱の中身を確認し始める。

平若女 ええと、これはこっち。

平若男 これは、後回しで。

西米女 これとこれは、こっち。

西米男 ええと、これはPCエンジンだから、こっち。

平若女 これ、アンタの？

平若男 いや、わかんない。

平若女 じゃあ、後回しと。

西米女 これ、アンタの？

西米男 いや、違うかな。

西米女 じゃあ、後回しと。

舞台の前面に、後回しにされた箱が徐々に積みあがっていく。

平若男 お、メガドライブ！　そしてスペースハリアー口。懐かしい。まだ捨ててなかったんだな、これ。

西米男 え、あの、それ、ウチの荷物じゃないですか？

平若男 え、持ってるのメガドライブ。
西米男 あ、はい。
平若男 懐かしいよね、ほんと。
西米男 いや、今年買ったばかりで、別に懐かしくは。
平若男 あ、ヤフオクとかで？
西米男 いや、違う店ですけど。
平若女 (平若男に) ほら、そこ、手を休めない！
西米女 (西米男に) ちょっと、これは？

平若男、とりあえず中間地点くらいに箱を置いて平若女のところへ。
運び屋は黙々と「持つて行くもの」を運び出したりして作業をしている。

平若女 ちょっと、これ何。

宇宙刑事ギャバン (レーザーディスク版) が出てくる。

平若男 うわー懐かしい。宇宙刑事ギャバン。
平若女 これ、もしかしてレーザーディスク？
平若男 そうそうLD、LD。
平若女 なんでこんなの取ってるのよ。
平若男 いや、持つてるの忘れてた。
平若女 捨てていいよね？
平若男 いやあ、それはちょっと。貴重じゃない、これ？
平若女 知らない。わからない。
平若男 LDプレーヤーどうしたつけ。
平若女 プレイヤーは壊れて捨てた。覚えてる。
平若男 え、そうだっけ。
平若女 捨てて。見れないのにとついてもしょうがないでしょ。
西米男 (会話を聞いてた) あ、ありますよ。LDプレーヤー。どの箱だっけ。ギャバン
つてLD出てたんだ。知りませんでした。
平若女 いいです、探さなくて。捨てますから。
西米男 あ、じゃあ貰ってもいいですか？
西米女 荷物、減らすって約束だったよね。増やしてどうすんの。
西米男 他の、捨てるからさ。
西米女 他のつて、さつきから全然「捨てる」の増えてないじゃない。
西米男 うん、これからこれから。

西米男、適当な箱を開ける。
中から「たまごっち」(未使用品) が出てくる。

西米男　　なんだこれ。たまごっち？　なんで何個も？

たまごっち（初代）が何個も出てくる

西米男　　これ、何？

西米女　　知らない。アンタのじゃないの？

西米男　　いや、こんなの見たことない。なんだろう？

西米女　　あの、ごめんなさい、これ、そちらのですかね。

平若女　　え、なんですか？

西米女、平若女にたまごっちを見せて：

平若女　　あ、たまごっち！

平若男　　あ、それ：

平若女　　うちのです。

平若女、何故か機嫌が悪い様子。

西米女　　すみません、間違って開けちゃって。

平若女　　いいんです、捨てちゃってください。

平若男　　ええっ！

西米女　　いいんですか、なんか新品みたいですけど。

平若男　　ちよつと待って、調べるから。

平若女、捨てるエリアに箱ごと移動させる。

平若男、スマホで何やら調べて。

平若男　　売れる、売れるよ一個三千円以上で！

平若女　　たまごっち、いくらだったっけ。

平若男　　たしか定価1980円。

平若女　　で、いくらで買ったんだっけ、それ。

平若男　　プレミア価格で、確か5千円？　いや一万円だったかな。

平若女　　どこも品切れで、色んなところから探して買ってきてさ。

平若男　　あの時はね、もっと高くなると思ったんだよね。

平若女　　そしたら、新しいのが出て。

平若男　　新種発見・たまごっちね。

平若女　　高く売れるはずが大暴落。

平若男　　申し訳ありませんでした。でもほら、今なら三千円で・・・

平若女　　捨てて。いくらで売れるとか関係ないから。それ見ると、そういうイヤーな記

憶、思い出しちゃうから。

平若男

…はい。

平若男、そう返事をしつつ、たまごっちの入った箱も後回しエリアに。更に「後回し」エリアの荷物が増え、箱は腰の高さくらいに積みあがる。と、作業中の運び屋「持って行く」荷物を見て…

運び屋

あの、すみません。この辺のやつ、留めてもらっていいですか、フタ。

平若女

あ、ごめんなさい。

運び屋

ちゃんと留めないと、中身が出ちゃうとマズいんで。

平若女

それが、留めるものがなくて。

西米女

あ、使います？ 紐。

西米女、虎ロープを取り出す。

運び屋

大丈夫ですよ。ありますから、ガムテープ。

運び屋、ガムテープを取り出して蓋を閉じ始める。

ガムテープを切っては貼りする音が響く。

平若女

大変ですね、お仕事。宅配便と引越越し両方なんですか。

運び屋

あ、いや、今日はたまたまです。派遣なんです。その日その日でいろんなところで、いろんなもの運んでいます。

平若男、箱を開ける。

と、その箱の中から「西暦」を書いた紙が出てくる

その数字は「1995」。

その陰から「ウインドウズ95」が出てくる。

平若男

ウインドウズ95。そういや最後にパソコン買ったのいつだったっけ。

平若女

今じゃスマホでだいたいできちゃうからねえ。

平若男

これは、いらないよね。

平若女

はい、捨てて。

と、なにかが軋むような音。

わずかに部屋の明かりが明滅する。

西米男

あれ、今揺れなかった？

西米女

そう？ 気のせいじゃない？

平若男

ええと、これは？

平若男、新たな箱を開ける。
と、その箱の中からも「西暦」を書いた紙が出てくる
その数字は「2000」。
その陰から「プレイステーション2」が出てくる。

平若男 プレステ2！

平若女 本当、アンタの荷物って漫画とゲームばかり。

平若男 事実だから否定できない。仰る通りです。

平若女 はい、捨てる。

平若男 駄目、これは駄目。

平若女 アンタ、プレステ3も4も持つてるでしょ！

平若男 互換性がないんだよ！

平若女 なによそれ。

4は4のゲームしかできないし、3は3と1のしかできないんだよ。要するに
プレステ2のゲームはプレステ2本体を持ってないと遊べないんだよ。だから
さ、売ったら結構な値段になるんだよ、これ。

平若女 売ったらって、どうせ売らないんだよ。

平若男 売らないよ、こんな貴重なもの。

平若女 (あきれた) ああ、もう…。

平若男、プレステ2を断固として「持って行く」方に運ぶ。

平若男 お願いします。

運び屋 (ガムテで蓋をして) はい、わかりました。

平若女、新たな箱を開ける。

と、その箱の中からも「西暦」を書いた紙が出てくる

その数字は「2005」。

その陰から「Xbox360」が出てくる。

平若女 ちよつと、これ何。

平若男 Xbox360。

平若女 何それ。持ってたっけ、こんなの。

平若男 あんまりおもしろいソフトがなくてさ、結局全然遊ばなかったんだよね。

平若女 …捨てる。

平若男 …はい。

カタカタとなにかが揺れる音。

また、部屋の明かりがわずかに明滅する。

西米男
西米女
ほら、やっぱり揺れてるって。
集中！

先ほどより、明らかに部屋が揺れている。

平若男#
西米男#
平若女※
西米女※
西米男
あれ、揺れてる。
いや、だってこれ。
揺れてるね。
トラックが家の前通ってんでしょ。いつものことじゃない。
いや、前の部屋は確かにそうだったけどさ。…あ、おさまった。

部屋の揺れがおさまる。
と、部屋の隅に、運び屋が青い顔でうずくまっている。

平若女
運び屋
平若男
平若女
大丈夫ですか？
あ、すみません。大丈夫です。ちょっとこういうの苦手で…。
大丈夫？
アンタは手を動かして。

運び屋、呼吸を整えて…

運び屋
平若女
運び屋
平若女
運び屋
もうずいぶん前なんですけど、今でも揺れるとちよっと。
ああ、そうなんですか。
あの、これって意味、あるんでしょうか。
これって、引越しですか？
ええ。

それは、あるんじゃないですか、もちろん。
ここにあるものを、別のどこかに移動するだけで、しかも、そのほとんどが忘れられて、思い出したとしてもほとんどがいららないもので、どうせいつか捨てられるだけのものだとしたら、これって意味、あるのかなあって。それじゃあ何も変わらないんじゃないかって。思うんです。時々。

平若女
運び屋
まあ、そういう意味ではそうかもしれないですけど、場所も変わるし、なににより気分が変わるじゃないですか。心機一転、これまでの嫌なことは忘れて、新しい場所に引越して。意味、あると思いますよ。
…すみません、変なこと言いました。もう大丈夫です。

運び屋、作業に戻る。

平若男
ええと、この辺なんだっけ？

平若男、新たな箱を開ける。
と、その箱の中からも「西暦」を書いた紙が出てくる
その数字は「2011」。
その陰から「3DS」が出てくる。

平若男

3DS！

平若女

捨てて！ それも新しいの持ってるでしょ。

と、そこに突如「緊急地震速報」の音が響く。
運び屋、反射的に逃げ出し、どこかの陰にうずくまる

西米男

え、何の音ですか、これ。

続いて携帯電話向けの「緊急地震速報」の音が響く。

西米女

地震？

今度は大きめの振動音。
部屋の明かりが大きく明滅する。
ざわつく舞台上の人々。
と、突如の轟音。
逃げ惑う人々。
明滅する明かりの中、積み上げられた段ボールの山が崩れ落ちてくる。
暗転。
しばし鳴り続く轟音。津波の警報音。
やがて、静寂。

どこからか、ペンライトの明かり。
 揃いの作業服と帽子にマスクをした四人が姿を現す。
 舞台上には崩れ落ちた箱と、まき散らされた平成の西暦（1989-2019）。
 そしてその年を象徴する単語の数々が散らばっている。

作業員 2 もう、何年かな。
 作業員 3 二、三十年くらい？
 作業員 4 そんなもんじゃないでしょ。
 作業員 1 そうかな？
 作業員 2 そもそも二十なの？ 三十なの？
 作業員 3 もうずいぶん昔のことだし、はっきり覚えてない。
 作業員 4 だとしても“くらい”って何よ。
 作業員 3 どういう意味？
 作業員 4 仮に二十年だとして。
 作業員 3 うん。
 作業員 4 どっちかわかんないでしょ。二十年より長いのか短いのか。
 作業員 1 それ、突き詰める必要があるのかな。
 作業員 2 どうなんだろう。
 作業員 3 だいたいでいいんじゃないの。
 作業員 4 そうかなあ。
 作業員 1 もう、終わったことだから。
 作業員 2 昔、どんなに流行ったことでも。
 作業員 3 昔、どんなに好きだったことでも。
 作業員 4 思い出せないなら、ないものと同じ。∴それでいいのかな。
 作業員 1 わからないけど。
 作業員 2 多分、もうどうしようもない。
 作業員 3 もう思い出すことすらできないから？
 作業員 4 色んなことがあった。
 作業員 1 経験したことも。
 作業員 2 経験したような気になっているだけのことも。
 作業員 3 色んなことがあった。
 作業員 1 二十年だか
 作業員 2 三十年だか
 作業員 3 とにかくそれだけの時が流れて
 作業員 4 何が変わったんだろう。
 作業員 1 経済が成長して
 作業員 2 科学が進歩して

作業員 3 使う道具が変わっても
作業員 4 私は、何か変わったんだだろうか。

作業員 1 同じように起き、

作業員 2 同じように生き、

作業員 3 同じように眠る。

作業員 4 それなのに。それだけのことなのに、どうしてこんなに苦しいんだろう。

作業員たち、箱の中から額縁を取り出す。

黒いリボンのかかったそれは、何かの遺影のようでもある。

作業員たち、額縁を中央の「捨てるもの」の段ボールの上に置く。

そして、その周りに段ボール箱や西暦・単語を集め、積み上げ始める。

と、その段ボールの山を崩すように、運び屋が現れる。

運び屋

運び屋 運ばないと。意味がわからなくても。もしも本当に意味がないとしても。

運び屋 黙々と、口の開いた箱をガムテープで留め、荷物を運び続ける。

しかし、そのスピードは明らかに作業員たちのペースにはかなわない。

作業員 1 忘れる

作業員 2 忘れる

作業員 3 忘れる

作業員 4 忘れる

作業員 1 一度覚えたはずのことも

作業員 2 次々に流れ込む情報に押し流されて

作業員 3 上書きされて

作業員 4 次々に忘れていく

作業員 1 忘れる

作業員 2 忘れる

作業員 3 忘れる

作業員 4 忘れる

作業員 1 忘れる

作業員 2 忘れる

作業員 3 忘れる

作業員 4 そうしないと、溢れてしまうから

と、ついに運び屋のガムテープが尽きる。

運び屋

誰か！ 何か！ とめるものを！

と、無数のガムテープの芯だけが舞台上に降り注ぐ。

音楽。

運び屋、「捨てるもの」の場所でもはや一步も動けない。

作業員たち、運び屋の周りにも荷物を積み上げていく。

運び屋を囲むように、荷物が完全に積みあがる。

明かりはフェイドアウトを始め、終幕のような雰囲気。

作業員たち、黄色と黒の「立入禁止」のテープを周りに張っていく

それが完成したかに見えた刹那：

運び屋が段ボールの山をかき分け、もう一度姿を現す。

運び屋

まだ続いている。たとえ打ち捨てられ、忘れられようと、たしかに、ここで。

運び屋、時代の流れに抗うかのように、打ち捨てられかけた「歴史」をひたすらにばら撒き続ける。

やがて、暗転。

(幕)

脚本執筆に際し下記のサイトを参考にしました。

・ Wikipedia 「コンピュータゲームの歴史」